

南田登喜子 [文]  
ミディ中嶋 [写真]

南半球の  
静かな春祭

# カウラの サクラ

桜祭りは市民に春の到来を告げるカウラの年中行事。日本庭園で開催される



人口1万3千人ほどの小さな内陸の町の春をまだ若い桜並木が彩る



カウラには日本とのゆかりを示す道標や案内板が各所に設置されている



植え付けたばかりの桜の苗木

止する命令を下した。死によつて名誉を回復するための自殺的暴動と説明され、「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓を知つても、オーストラリア人には到底理解できなかつただろう。戦後になつて遺骨を持ち帰る提案がなされたときにさえ、日本政府が「カウラに日本兵はいなかつた」と回答したという話は、戦争を知らない日本人のわたしにとつても信じがたい。

終戦後、激しい反日感情が吹き荒れる中、地元のカウラ復員軍人会のメンバーが、放置されていた日本兵の墓の清掃を始めた。やがて国交が正常化して、日本人戦没者墓地が1964年に建設された。戦争中にオーストラリア各地で亡くなった日本兵と民間人あわせて500人以上が眠る墓地は、以来日本領土として取り扱われている。紆余曲折を経て本格的な日本庭園も完成



牧歌的な田園風景が広がるオーストラリアの田舎町カウラ。町のはずれにあるサクラ・アベニューの桜は10月初旬にちょうど見ごろを迎え、日本庭園では恒例の桜祭りが開催されていた。「平和だね……」という言葉が思わずこぼれそうになり、一瞬その重さに口をつぐむ。日本人の捕虜収容所があつたこの町で、悲劇の集団脱走事件が起こつたのはわずか六十余年前のことだ。

し、日豪関係修復の機運は目に見える形で高まっていく。

日本庭園から収容所跡地を通り、墓地までを結ぶ道はサクラ・アベニューと名付けられた。国際フレンドシップ・プログラムの一環である「日豪友好の桜並木道」は、5キロの道路沿いに桜を2000本植えることを目指し、1988年にスタートした。桜木の大半は、日本人の寄贈によるものだ。個人、学校、団体、企業、自治体、政治家……とさまざまな名前が並ぶが、一本一本の木にそれぞれの思いが込められている。木の根元のプレートには寄贈者名と並んで、その木を守るカウラ在住の子供や若者の名前が刻まれる。

桜の木は、維持費を含めて1本10万円。桜祭り開催中に植樹セレモニーに出席した。わたしも関わっている「がんばれ地球人！プロジェクト」が、「ちよつとずつ、みんなで」という趣旨で草の根活動を続け、ようやく1本目の木を寄贈できるだけの寄付金が集まつたのだ。さわやかな春風に吹かれて、少しだけ自分の背より高い若木の根元に土をかけていると、日本人として、こういう状況でこの地に立てる平和の尊さが身に沁みだ。

1944年8月5日未明、カウラ第12戦争捕虜収容所。デテクルテキハミナミナコロセ——突撃ラッパを合図に宿舎に火が放たれ、収容されていた日本兵の大半が一斉に飛び出した。手に持った食事用のナイフやフォーク、野球のバットなどで、機関銃やライフルと抗戦できるとは誰も考えていなかっただろう。銃弾が飛び交うなか、どんな気持ちで鉄条網のフェンスに突進したのか、と思うと胸を衝かれる。

収容されていた日本人捕虜の数は約1100人。フェンスは越えられても、逃げおおせた脱走兵は皆無だった。銃撃に倒れ、あるいは自決して、最終的には234人が亡くなり、オーストラリア側も監視兵3人と将校一人が犠牲になった。現代軍事史上最大規模の捕虜脱走事件といわれるが、当初オーストラリアは日本軍管轄下にある豪州人捕虜への報復を恐れ、事件の報道を禁



日豪親善を象徴する桜



	1
4	2
	3
5	
6	

- 1：市役所前の「世界平和の鐘」
- 2：修学院離宮がモデルの日本庭園
- 3：墓碑は偽名が多く、無名戦士の墓も
- 4：陽光を浴びる収容所跡地
- 5：追悼法要で読経する僧侶
- 6：日本庭園でピクニックする家族連れ



真新しいピカピカのプレートの番号は904番。このペースでいけば、目標の2000本達成まではあと20年以上かかる。道のりは、まだまだ遠い。木を守り、この町で平和を担う役割の子供たちも、どんどん都会に出て行ってしまいカウラには残らないという嘆きも聞いた。これからもサクラ・アベニューが平和への祈りと日豪親善のシンボルであり続けるためには、どうすればいいのだろうか。

あいにく桜は植樹しただけで、「ハイ終わり」というわけにはいかない。病気にもなるし、養水分不足で枯れてしまうこともある。カウラの土壌は比較的肥沃ながら粘土質、かつ年間降水量は600ミリ余りで日本の平均の3分の1強ほど。乾燥や過湿に弱い桜の木が健全に育つことは、簡単なことではないらしい。川の水を木の根元に供給する設備が整備された後も、立ち枯れた木が幾本も植え替えられているようすを見ると、日本の桜守に来てもらえないなら、もう少し何とかなるのじゃないか、とどこかしい思いも抱く。

文化センターを併設した日本庭園では、桜祭りが盛況で、折り紙や書道のワークショップ、茶道や生け花、空手や相撲などのデモンストレーション、尺八と琴の演奏、日本酒の試飲など日本文化関係のイベントを楽しむ普段着



それとも、背景の空が青すぎるせいなのか、平原が広すぎるせいなのか……いや、もしかしたらそれは、異国の過酷な自然環境のなか、生き残ってきたたくましさ秘めているからなのかもしれない。

のオーストラリア人でにぎわい、陽気な笑顔があふれていた。祭りの最終日には、日豪の戦没者墓地で慰霊のための和解の式典が、簡素ながら厳かに執り行われた。敵国だった戦没者同士が隣り合って眠る場所なんて、ほかにあるのだろうか。今回のカウラ訪問では、思わぬ人に偶然出逢った。逃亡中の脱走兵に朝食を与えたというメイ・ウィアー夫人の息子、ブルース・ウィアー氏だ。当時、10代の子供だったウィアー氏はその場になかったと前置きした上で事件について、「あんなに怖い思いをしたことはなかった。あの頃、日本人は動物と同じだつていわれていたんだよ。遙か昔のことだけど……」と穏やかに語った。ウィアー家には、紅茶を入れるために使った当時のティーポットが今でも残っているのだそうだ。四十余年たつて、ウィアー夫人が亡くなった後、元日本兵がウィアー家を訪ねたという。「あんないい人には会ったことはないな。本当にいい人だったよ。思いつくと今だつてついつい感情的になつちまうなあ」と涙ぐむウィアー氏に救われた思いがした。



- カウラへの行き方 シドニーから車で約4時間半。あるいはカントリーリンクでバサースト駅またはリスゴー駅へ行き、バスに乗り継ぐ。
- サクラ祭り カウラ日本庭園で毎年9月下旬～10月上旬に数日間開催。
- 桜木寄贈の窓口 日豪文化交流協会(AUJACE Association Inc) TEL: 61-2-9327-5459

者数は、毎年70万人前後。かつて日本軍がこの国を攻撃したことを知らずに観光に来る人も少なくなく、大半はオーストラリア人を評して「フレンドリー」だという。昨年は日豪友好協力基本条約の締結30周年を記念した日豪交流年にあたり、両国各地でさまざまな催しが行われた。なぜ日本とオーストラリアは今のような友好関係を短期間で築くことができたのか。ヒントはたぶんカウラにある。太平洋戦争はすでに遠い昔のことなのかもしれない。けれど、21世紀になつても各地で紛争は絶えない。それぞれが「戦後」を迎えたとき、カウラの人々のように、憎しみの連鎖を断ち切り、かつての敵国の国花を愛でることとはできるだろうか。